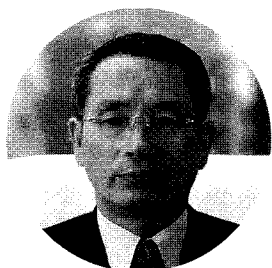


JEMA の安全管理活動について



環境衛生施設維持管理業協会 会長 佐藤 敏郎

日本人にとって1月は、年度替わりの4月とは異なり、特別な月に位置付ける意識があり、新たな誓い・決意をもって発進する新鮮な年の始まりなのである。安全に関連する活動でも年始安全祈願を始め、ゼロ災害達成に向けての活動開始の月度である。

小生が35年前の昭和45年に社会人としてメーカーに就職し、最初の配属部門が工場の安全指導課であった。当時の事業所の安全衛生管理水準と今日とは比較にならないが、鋳物製品の工場でもありことさら事故多発事業所で、社内でも肩身の狭い思いをした経験が今でも思い出される。以来、本社管理部門に在籍した3年を除き、時々の立場は異なるものの、企業に於ける安全衛生管理活動に長く関わって来た体験と、協会の立場を重ね合わせ、安全管理に関する思いを述べて見たい。先ず、

1) ライン管理の重要性、である。事故・災害は最前線の瞬時の行動・判断ミスで発生するのが通常だが、その対策・日常活動もライン展開しか、あり得ない。然らば、各社がラインに

よる安全管理の具体的内容を明確にして、その定着・浸透に向けて平素の取り組みが肝要である。組織規模が大きくなると得てして、スタッフ主導の細分化された活動になる傾向があり、さらには現場責任者クラスも、IT化の潮流に引きずられ、人間行動を直接確認することが疎かになっているのは、我が社だけだろうか。現場責任者が、書類上だけで安全管理業務を遂行することなく、現場第一線で動作確認する日常が継続されてこそ、ゼロ災害達成の近道である。この事は各企業の教育・訓練のテーマであるが、同時に当協会も昭和63年から年一回「事業所管理者研修会」を開催する中で、安全管理を中心に現場諸管理に通じた所長養成に努め、年間100名の方が修了し、全国で活躍中である。JEMA 会員会社の度数率（いずれも休業1日以上で算定）は1.32と全産業平均1.78と比較し、低い実績を保持できていることも活動の成果であり、今後もさらに充実すべき事業活動である。

2) メンテナンスを重視したプラント設計思想の確立、である。プラントに限らず、生産設備

ライン設計でも体験があるが、基本的な設計思想・予算・計画を基に、実行部隊が中心となり
枢要な部分は検討が重ねられ設計・施工される
訳だが、意外に見落としがあるのは、日常の運
転管理・頻度が少ない点検作業・トラブル想定
の構造、さらには補修を想定した足場確保等、
頻度が少なくとも必ず発生する作業に対する物
的装備不足が盲点となり、事故・災害の誘発要
因になっている事例は多い。勿論、事業者・メー
カー間で概ね決定される実状を考えるならば、
メンテ子会社の計画段階からの参画は現実には
難しく、子会社も含めた個別企業の問題である。
しかし、設備点検・安全パトロール等での指摘
を承けての追加工事、作業性向上を狙いとした
改造工事等、結果的に無駄な出費に繋がってい
る現実も無視出来ない。平成6年に作成された
「安全マニュアル」の改訂作業に加え、今年度当
協会の技術部会から安全衛生関連テーマを多方
面から検討する専門部会を分離独立することを
構想中で、災害事例情報交換は勿論、災害防止
を狙いとした自主基準をどのように考えるか、
散在している各社の知恵・教訓を集約する方向

で検討開始した次第である。会員会社の情報公
開を積極展開する中で、信頼性の高いプラント
運転が今まで以上に実現することが狙いである。
新たに発足予定の安全部会活動の内容が、新設
プラント設計に反映される動きになるなら望外
の幸せである。

3)最後に、ゼロ災害達成に向けてはトップの
姿勢、が最も重要である。事故防止に向けて、予
防管理を重視するならばトップ自身の災害防止
に関する明確な方針と現場確認行動が大切であ
る。号令を発するだけに止まっているか否かは
部下が良く見ている。安全管理に王道はなく、
毎日の基本に忠実な作業の積み上げである。現
場最前線での展開状況確認と組織の緊張感を維
持する狙いから、夏季と冬季には事業所パト
ロールを慣例とし、併せて事業所長クラスと盃
を交わしながら、議論を交わすのは労務屋出身
の小生が生き甲斐を感じる瞬間でもある。昨年
までの事故・災害を教訓に、今年もゼロ災害達成
に向け、地道な努力を覚悟している正月である。